

富山大学人文学部令和3年度卒業論文

ネットを介した出会いにおけるギャップ

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
学籍番号 11810020
氏名 大江 匠真

<目次>

第1章 問題関心.....	1
第2章 先行研究	
第1節 ゴッフマンの対面相互行為理論.....	2
第2節 ギャップに関する研究.....	3
第3節 まとめ.....	4
第3章 調査	
第1節 調査概要.....	5
第2節 インタビューイーのプロフィールと対面で会うまでの過程.....	7
第4章 ギャップの種類と関係への影響	
第1節 調査対象者 A・B.....	9
第2節 調査対象者 C・D.....	10
第3節 調査対象者 E・F.....	11
第4節 まとめ.....	12
第5章 ギャップが当惑に結びつかない要因の分析	
第1節 他者のギャップの捉え方.....	13
第2節 ネット上でのイメージ.....	15
第3節 ギャップの想定	
第1項 ギャップの発生をリスクと捉えない.....	17
第2項 ギャップがリスクになる相手とは会わない.....	18
第3項 実際の姿を想像しないようにする.....	18
第4節 ギャップの活用.....	20
第6章 ネガティブなギャップの分析	
第1節 許容できないギャップ.....	22
第2節 ギャップがあつてうまくいかなかった事例.....	24
第3節 ネガティブなギャップを感じたあとの関係性.....	27
第7章 考察	
第1節 ギャップが当惑に結びつかない理由とは.....	29
第2節 ネガティブに機能するギャップとは.....	31
第3節 まとめ.....	33
注.....	34
参考文献・参考サイト.....	34

第1章 問題関心

近年 SNS の利用率の増加が著しい。総務省の情報通信白書(2017)では、LINE・Facebook・Twitter・mixi・mobage・Gree のいずれかの SNS を利用している割合は、2012 年では 41.2% であったのに対して、2016 年には 71.2% に上昇しており、SNS の利用が社会に定着してきている現状が指摘されていた。また同白書において、年代別で見ると 10 代は 54.7% から 81.4%、20 代は 81.8% から 99.7% と特に若い世代の利用が盛んであることがうかがえる。このように生活に根付いてきた SNS はいつでも・誰とでも連絡が取れるため、既存の相手との交流はもちろん、新しいつながりを生み出すことも可能とする。総務省の 2018 年の情報通信白書では、各ソーシャルメディアで「自ら情報発信や発言を積極的に行っている」人を対象とし、ソーシャルメディアで知り合った人と現実で会ったことがあるかを分析した。結果、Facebook や Twitter では約 50% 程度の人が実際に会った経験があるという事が明らかとされており、ネットを介した出会いは現代において珍しいものではなくなってきていることが窺がえる。

こうした SNS が先行する形でのコミュニケーションでは、ネット上で想像していた印象と実際に会った時にギャップを感じることもあるだろう。思い描いていた姿と異なる相手が現れたとき、困惑しうまくコミュニケーションが取れなくなってしまうのではないだろうか。本稿では、ネットを介した出会いにおいて初対面の場で発生するギャップが、関係に与える影響について調査していきたい。

第2章 先行研究

第1節 ゴッフマンの対面相互行為理論

「ネットと現実の姿にギャップを感じると困惑しコミュニケーションが取れなくなるか」という問いを考えるに当たって、対面相互行為を研究したアメリカの社会学者、アーウィング・ゴッフマンの理論を参照したい。彼は日常的な相互行為を分析する視点として、初めて“ドラマツルギー（演出論的アプローチ）”を用いた。この観点では、日常生活が行われる場は劇場に見立てられ、そこでの行為は“パフォーマー”が“オーディエンス”に向けて披露するショーと捉えられる。“パフォーマンス”とは、「ある特定の参加者が他の参加者に対して印象を与えるような挙動の一切であり、“オーディエンス”は「特定の参加者および彼のパフォーマンスを基本的準拠点とした際に、他のパフォーマンスを寄与する人びと」（Goffman, 1959=1974, 18 p）と定義される。

ショー（相互行為）を順調に進めていくためには、パフォーマーとオーディエンスの協力が必要となる。そのための相互行為の方針は、最初に獲得した情報から立てられ積み重なっていく（同書：12-13 p）。また相互行為が進展していく中で、この方針と矛盾するような出来事が起きると「相互行為自体混乱したり、（双方が）しどろもどろになったりして中断されることもあり得る。参加者の反応を予測する根拠になっていた仮定のうちのあるものが維持しにくくなり、参加者は状況が誤って定義され、したがってもはや規定を欠く相互行為を自分たちが行っていることに気づくのである。」（同書；14 p）と、矛盾した印象の発生は当惑に結びつき、相互行為の混乱及び中断にまで結びつく可能性があることが指摘されていた。

ゴッフマンの理論をネットを介した出会いに当てはめて考えてみる。相互行為の方針は最初に獲得する情報、つまりネット上で相手の投稿を見たり交流を重ねていく中で獲得されていく。その上で実際に会い、先の方針と矛盾した印象、ギャップを感じる。ゴッフマンの対面相互行為理論に基づくと、ネットと現実のギャップは相互行為を混乱及び中断にまで陥れるものとなるのではないだろうか。

第2節 ギャップに関する研究

では実際に、どのような言説が挙げられているのだろうか。2013年にトレンド総見はネット人格について調査するために、SNSを利用している20・30代の男女300名を対象としたインターネット調査を実施した。「周囲にSNS上とリアルで人格が異なると感じる人はいますか」という質問に対して110名がいますと回答していた。この110名に対して更に「ソーシャルメディア上とリアルで人格が異なる人を見てどのように感じますか」と質問したところ、1番多く挙げられた回答(38.2%)は「普通だと思う」であり、ネットと現実で人格が異なる事に多くの人々が理解を指名していると指摘されていた。

清水(2017)は、若者のリアルとSNSでのキャラの違いに関して大学生9名を対象としてインタビュー調査を実施した。対象者達は皆SNSとリアルでキャラが違う知り合いがいた。そのギャップの評価に関して、SNS上のキャラが異なると言われたことがある人・その自覚がある人・SNSの利用頻度が高い人・アカウントを複数持つ人は他人もSNSとリアルではキャラが異なるものだと考えており、好意的に受け止めていた。一方SNSとリアルでのキャラが基本的に同じ・投稿を全くしないという人は、リアルもSNSも同じ人間と考えマイナスに受け止めるという結果であった。ギャップの評価には自身のギャップ意識やSNSの利用形態が影響を及ぼす可能性が指摘されていた。

2018年に総務省は、ネットの知り合いと実際に会った際の信頼度の変化を調査した。結果、信頼度がとても高まった・やや高まった・変化なしと回答した割合は97.6%に昇り、実際に会ったことにより信頼度が低下している割合は非情に小さかった。

渡辺・山下(2009)は専修大学ネットワーク情報学部生169名に対して、ネット友人に関する調査を実施した。結果ネット上の知り合いと実際に会ったことがあるのは38名(22.4%)であった。この38名のうち、実際にあって印象変化があったと回答した人は77.7%がネット上で関係を継続していたが、印象変化がなかった人は41.2%しか継続していなかった。ギャップを感じた人の方が関係を継続しているという結果であり、ギャップが相互行為に中断をもたらすことはないこと、間接的に当惑に結びついていないことが窺える。

第3節 まとめ

第1節、第2節ではゴッフマンの理論、ギャップに関する研究を見てきた。対面相互行為の理論に基づくと当惑に結びつくはずのギャップであるが、ネットを介した出会いにおいては寛容に受け止められている様子、ギャップがあった方が関係を継続しているという結果まで示されていた。対面の場合では当惑に結びつくはずのギャップが、なぜネットを介した出会いにおいては関係にネガティブな影響を与えないのだろうか。

本研究では、「ネット経由で出会い、少なくとも一方がギャップを感じていた」大学生のペアに対してインタビュー調査を実施する。「ネットと同じ距離感で接する事ができたか」を指標とし、ギャップが当惑に結びついているかどうか検討する。またギャップへの認識や対象者達の過去のギャップを感じた経験などを参考にしながら、当惑に結びついていない場合はその理由を、ネガティブに作用するのはどのようなギャップであるかについて考察していきたい。

第3章 調査

第1節 調査概要

調査を進めるために、筆者の知り合いからネットで知り合った人と実際に会いギャップがあったという人を探した。その後ギャップがあった相手側にも協力を依頼し、富山大学生3組（計6人）に対してインタビュー調査を実施した。インタビューでは、出会った経緯や感じたギャップ、会った際の距離感といった対象者同士のことに加えて、ギャップへの認識や過去の事例についても質問した。以下がその詳細である。

【調査対象者 A・B】

第1回インタビュー

日時；2020年11月7日（土）

場所；富山大学人文学部棟1階ロビー

第2回インタビュー（Aのみ）

日時；2021年1月23日（土）

場所；Zoomにてオンライン上で実施

第3回インタビュー（Aのみ）

日時；2021年10月13日（水）

場所；富山大学人文学部社会学端末室

【調査対象者 C・D】

第1回インタビュー

日時；2020年12月6日（日）

場所；富山大学学生会館

第2回インタビュー

日時；2021年1月31日（日）

場所；Zoomにてオンラインで実施

第3回インタビュー

日時；2021年8月26日（木）

場所；富山大学人間発達科学部棟1階ロビー

第4回インタビュー

日時；2021年10月17日（日）

場所；Zoomにてオンラインで実施

第5回インタビュー

日時；2021年12月20日（月）

場所；富山大学学生会館

【調査対象者 E・F】

第 1 回インタビュー

日時；2021 年 6 月 20 日（日）

場所；富山大学人文学部棟 1 階ロビー

第 2 回インタビュー

日時；2021 年 8 月 29 日（日）

場所；Zoom にてオンラインで実施

第 3 回インタビュー

日時；2021 年 10 月 19（火）

場所；富山大学人文学部社会学端末室

第 4 回インタビュー（E のみ）

日時；2021 年 12 月 17（金）

場所；L I N E 通話にてオンライン上で実施

第2節 インタビュー어의プロフィールと対面で会うまでの過程

本節では今回の対象者達の基本情報と、対面で会うに至るまでの経緯について紹介する。なお、対象者達の学年は第1回インタビュー時点のものである。

【調査対象者 A・B】

A：富山大学経済学部1年生の男性。

B：富山大学理学部1年生の男性。

・会うまでに経由した SNS：Twitter（大学アカ⁽¹⁾）

A は浪人時代 Twitter アカウントを運用しており、そこで B がツイートしていた模試の成績を目にして一方的に認知していた。その後、A は富山大学に進学することになった。B のアカウントを見ると同じく富山大学に進学していたために、A から B にフォロー申請を送った。B は A をフォローバックする前にツイートを見ると、参考書についてツイートしていたため「仮面浪人（ある大学に在籍しながら、別の大学合格に向けて勉強している人）ですか」という DM を A に送った。この段階ではまだ B は A の事をフォローしておらず、仮面だったらフォローしようと思ったと語っている。その後 DM でやりとりを少しして、B から A を誘い対面で会うに至った。

【調査対象者 C・D】

C：富山大学人間発達科学部1年、女性

D：富山大学人間発達科学部1年、女性

・会うまでに経由した SNS：Twitter（大学アカ）→Zoom→Twitter（C の縮小アカ）

C・D の最初の交流は Twitter の大学アカウントで行われた。C が Twitter をかなり頻繁に利用していると、D を含めたツイ廃⁽²⁾の人が周りに集まってくるようになり、4月の終わり頃から空リブ⁽³⁾で交流をするようになった。5月に D が Twitter で課題を一緒に進めるメンバーの募集をかけ、集まった10人程度で Zoom を使って交流をした。この時顔を出していない人もいたが、C・D は顔を出していた。Zoom での交流後に C はツイート数が増えたことから縮小アカウント⁽⁴⁾を作成し、D ともつながっていた。6月に複数人で服を買いに行った際に、初めて対面で会うに至った。C はこのメンバーの中に zoom で顔を合わせた人はいたが、対面で会ったことがある人はいなかった。D はこの内何人かと大学の授業オリエンテーションで1度話したことがあった。

【調査対象者 E・F】

E：富山大学人文学部2年、男性

F：富山大学人文学部2年、男性

・会うまでに経由した SNS：Twitter（大学アカウント）→LINE

2人は最初に Twitter で知り合った。F が 1 年生の夏に大学用アカウントを作成し、同じ学部の人をフォローしていく中で相互フォローとなった。最初に交流したのは 11 月で、学部や大学受験のことについて話をした。12 月に F が「〇〇に行く予定がある」とツイートした際に、E が「自分も同じ日にそこにいるので会わないか」と誘った。その後、細かい予定を組むために LINE を交換し、同月に食事に行く形で対面で会うに至った。

第4章 ギャップの種類と関係への影響

今回の対象者達はネット上でどのような印象を抱き、どのようなギャップを感じていたのだろうか。またそのギャップは当惑に結びついたのか。本章では、対象者達を感じたギャップの種類と関係に与えた影響について見ていく。

第1節 調査対象者 A・B

この組でギャップを感じていたのは A のみであった。A は B に対して、ネット上ではツイート数や内容から暗いという印象を抱いていたが、実際に会ってみると爽やかだったというギャップを感じていた。

A えっとなんだろう、正直もっと暗いと思った。

B：おおー。

A：そんなツイートしないし、淡々としてたから。

A：なんかこう、大学受験に嫌になってそうな感じだと思ったら、普通に爽やかな奴やった。

そのギャップに関して A は、悪い印象ではなかったと話していた。また、2 人とも最初に会った時の距離感はネットの時と同じだったと回答していた。「暗いと思ったら爽やかだった」と一方が想定と逆の人物が現れたと感じているにも関わらず、距離感はネット上と一緒にあったと回答しており、ギャップが当惑に結びついていないように思われる。

第2節 調査対象者 C・D

この組では C・D の両方がギャップを感じていた。C は D に対して、Twitter 上で交流している際には「優しいほんわか系の小さい女の子」というイメージを抱いており、それは zoom で顔や声を知っても変化しなかった。しかし実際に会った際には、ほんわかとは真逆の「しっかりとしたお姉さんだった」というギャップを感じたという。

C：最初 Twitter で喋ってた時は、すごい D ちゃん優しいほんわか系の小さい女の子かなって思ってた。Zoom で顔見ても私より身長小さいと思ってる。でも実際会ったらどっちかって言うと、かっこいい系ですごい喋ってくれるし、お姉さんタイプやなって。

一方の D は C に対して、Twitter 上では「女子っぽい」という印象を抱いており、その印象は Zoom を経由しても変化しなかった。しかし、実際に会った際には「そこまでほわほわしていなかった」というギャップを感じていた。

D：もっとほわほわしとる感じかと思ったけど、そこまでほわほわしてないのかもしれんとは思った。

お互いのギャップに関して、C・D の両方がポジティブな印象だったと回答している。また 2 人とも「初めて会った際の距離感はネットの時と一緒だった」と回答しており、この組でもギャップが当惑に結びついている様子は見られなかった。

第3節 調査対象者 E・F

この組もお互いにネットでの印象と現実の姿にギャップを感じていた。E は F にネット上では、アイコンから「可愛い雰囲気の子」という印象を抱いていた。しかし実際に会った際には、可愛いとは真逆の強面の人が現れ驚いたという。かなり大きなギャップであったが、友達になれそうだしいいか、とそのギャップを肯定的に受け止めていた。

E: そう、っていう感じの人だと思ってたんですけど、いざ現れたのは若干強面の。「あれ、ちょっと、俺この人と会いに来たのかなー」って思って。ただ、なんていうか、コミュニケーションに支障があるみたいな人、外見の人がいらっしゃるじゃないですか。そういうわけじゃなかったから、良かったかなって、すごい思ってました。正直イメージとは違ってすごくビックリはしたけれど、でもなんか友達になれそうだし、良いかなって僕は思ってました。

一方の F は E のギャップに対して以下のように語っている。

F: アイコンが（動物）っていうのもあって、あと話し方とかもあつたんですけど、ちょっと真面目で、なおかつ鋭さがあるっていうか、キリッとした感じだと思ってたんですね。で、実際に会ってみるとフワフワとした感じじゃないですか。その逆で、韓国系の身長高い男の子かなーって。めっちゃスラッとした男の子かなって思ってたんですけど、いざ会ってみたらフワフワってしてたんですけど、でもその中にキレのある発言があったりもして、そこは本人なんだなあと思ったりもしました。

ネット上の段階ではアイコンや話し方から、容姿は高身長の韓国系で、雰囲気はキリッとしているという印象を持っていたという。実際に会うと、それとは真逆のフワフワとした印象でギャップは感じたが、時々の発言内容から Twitter の面影を感じたと話していた。「お互いのギャップはポジティブなものだったか、ネガティブなものだったか」と尋ねたところ、両者ともに「良いとも悪いとも思わない」「ただ違っただけ」と語っていた。また 2 人とも最初に会った時の距離感は、ネットと変わらなかったと回答していた。想像していた姿とは真逆の相手が来ても距離感は変わらなかったと語っており、この組もギャップが当惑に結びついていないように思われる。

第4節 まとめ

今回の対象者達を感じたギャップの種類と距離感をまとめたものが以下の表である。

対象者	ギャップの有無（種類）	距離感
A→B	有り（暗い→爽やか）	同じ
B→A	なし（面白い→面白い）	同じ
C→D	有り（優しくて小さいほんわか系→かっこいいお姉さん）	同じ
D→C	有り（女子っぽい→そこまでほわほわしてない）	同じ
E→F	有り（可愛い雰囲気の子→強面の男の人）	同じ
F→E	有り（高身長で真面目な韓国系→フワフワした雰囲気）	同じ

表4-1. 調査対象者を感じたギャップの種類と距離感

「暗いと思ったら爽やか」「可愛い男の子だと思ったら強面の人」といったかなり大きなギャップを感じていても距離感が変化したという語りは見られず、いずれのギャップも当惑に結びついている様子は見受けられなかった。なぜ想定と真逆のタイプが現れたような場合においても、困惑せずコミュニケーションが取れたのだろうか。

第5章 ギャップが当惑に結びつかない要因の分析

今回の対象者達は先行研究の結果と同様に、想定と逆のタイプの相手が来ても、そのギャップを受け止め当惑することなくネットと同じ距離感で接していた。なぜギャップは当惑に結びつかなかったのか。この章では、その要因として考えられる語りを取り上げ分析していく。

第1節 他者のギャップの捉え方

トレンド総見(2013)の調査では、他者のギャップに対して寛容である結果が示されていたが、今回の対象者達はどのように捉えているのだろうか。「ネットと現実でギャップがある人をどのように思うか」と尋ねてみたところ、以下のような回答が寄せられた。

A: 僕的にはギャップがあるのは普通だし、悪いことじゃないと思います。

D: うーん悪い方には思わん。

C: 会って実際「あ、こういう人なんかー」って思って。え、でも思うだけかな。

E: 別に使い方としてなので、それは個人の使い方なので僕が言うことではないし。

F: そこは自由で。

E: うん、自由じゃないですか。

ギャップに対して否定的な語りは見られず、「普通のこと」「個人の自由」「こういう人かと思うだけ」と寛容に捉えていた。なぜ他者のギャップに寛容になれるのか。A・E・Fは以下のように語っている。

大江: 「ここが違ったらイヤだ」って思うようなギャップってある?

A: まあでも性格とかテンションは、見てる側の捉えようなんです。

大江: ネットと現実のギャップっていうのはなんで生じてしまうと思う?

E: それは多分、相手の事を考えてしまうからではないかなあ、という感じです。おそらく向こうがそう思わせようとしてやっている、という事は必ずしも無くて。僕の方が「ああいう人なんだろうなあ」って勝手に考えてしまう部分が大きいと思うんですよ。だからギャップっていうのは生まれちゃうのかなって思います。相手がこう思われたいっていう理想を持ってから、そう思っちゃうこともあるし、思わせるように向こうが振る舞ってなくても、僕たちが勝手に思っちゃうのかもしれない。

F: んー、そこは個人の自由。あとギャップあるって、結局受け手の問題が結構占めてると

思うので、だからそこで難癖付けるって言ったならあれですけど、っていうのはちょっと違うのかなって思います。

このように、ギャップは与える側の問題ではなく、受け手側が勝手に想像してしまうために生じるものであり、批判すべきではないと考えているのだ。

また清水 (2017) では、ギャップの評価に当人のギャップ意識が反映される可能性が指摘されていた。他者のギャップに対して寛容だった A、C・D は自身のギャップについて以下のように語っている。

A: 自分は変わらないけど、(Twitter 上では) 言うことと言わないことがあるから。側から見たらあるかもしれないけど、自分は思っていることを言ってるだけだから、まあないっすね。

D: どうだろう、ほぼ素なんだけど。

C: そうやね確かに。

D: 結構素だから。

C: もう思ってることそのままツイートに書いてるからほんとに。

D: 起きたら起きたって言ってるしね。

C: そんなギャップってない気がする。

大江: 一緒って思われてると思う？

D: 意図してギャップを作ってないから(C: そうそうそうそう。)ギャップだと思われてても、「あーそうなんだ」ぐらいで終わる。

A は自分ではギャップがあると思わないが、Twitter ではツイートする事としない事があるために他者から見るとギャップがあるかもしれないという。C・D は Twitter 上でも素の状態で自分の思った事をつぶやいており、ギャップがあると言われても、それは意図したものではないために評価を気にしないと語っていた。

第2節 ネット上でのイメージ

今回の対象者達は実際に会った際にギャップを感じていたが、そもそもネット上でどこまで相手のことをイメージするのだろうか。実際に尋ねてみたところ、ハッキリと想像する人とぼんやりとしかイメージしない人に分かれた。ハッキリ想像すると語っていたのがC、E・Fである。

大江；2人ともネットで交流してる時に相手の事はイメージする？顔とか声とか、そういう情報って考えたりする？

C：あーでも考えて話してるかもしれない。

大江；二人とも結構（お互いの）顔とか雰囲気とか連想してたけど、Twitterの情報とかだけで結構「こういう人なんかなあ」って連想したりする？

E：めっちゃしますね。

F：そうですね。

E：基本的にTwitterで空リブ飛ばすときも、仮想的にそこに相手がいるって思って発言してるので、そうですね。

大江；自分の中でそういうイメージを作りあげるんや。

E・F：そうですね。

E：僕は基本的に全部なので。顔もそうだし、性格、声、考え方、出身地、全部基本的に考えるので。

この3人は顔や声まで想像すると語っており、Eはそれに加えて性格や考え方、出身地に至るまで、かなり具体的な像を描いているようであった。一方、ぼんやりとしかイメージしないと語っていたのがAとDである。

大江；今までに、実際に会ってみてギャップがなかったことってある？

A：絶対がないですね。

大江；どこかしらは違うんか。

A：だいたい違いますね。自分の思ってる先入観ってだいたいフワフワしてるんで。別に「こんな顔だろうな」とか「こんな背格好だろうな」とかっていう所まで想像する人って多分いないと思うんですよ。

大江；具体的にはそんなに描かないんか。

A：はい。

D：考えている時の方が多いんですけど、結局会ったら全然違う人が、ネットと現実が全然

違うっていう人結構いるから、自分の中でそう思ってるけども、「まあ違うだろうなあ」と思って想像するくらいですね。

A はネット上の交流では、顔や背丈など実際の姿までは想像せずぼんやりとしたイメージしか持たないと語っていた。D は顔や声を想像するが、実際は違うだろうとそのイメージを確かなものではないと捉えていた。

ネット上で顔や声など現実の具体的な姿をイメージしている場合と、ぼんやりとした不確かな像しか描いていないケースがあり、実際に会う前に抱く印象の程度には差異があるようだった。

第3節 ギャップの想定

第2節では、程度の違いはあったがネット上の交流で相手のことをイメージする様子が見られた。しかし一方で「そのイメージ通りの相手来るとは思っていない」という“ギャップを想定している”語りも共通して見られた。本節では、そうした語りを取り上げ分析していく。

第1項 ギャップの発生をリスクと捉えない

まずは「ギャップが生じる事は想定した上で、それをリスクと捉えていない」という語りである。BはAに対してTwitter上では面白いという印象を抱いていたが、実際は大人しい人が来るだろうと想定した上で、それをリスクと捉えずに対面で会うに至っていた。

B: まあでも、実際ネットでよく話す人って、経験上大人しい人多いんで。そうかなって思ってたならそうじゃなかったんで。例外だったんで。

またFからはギャップがあっても対応できるだろうという語りが見られた。「印象と違う人が来た際に、うまくコミュニケーションが取れないという不安はなかったのか」という質問に対しFは以下の様に語っている。

F: 不安はちょっと、ないと言ったら嘘になりますけど、そこまで心配する必要も無い。ほんとに、話せばなんとかなる、って思ってるので。ほんとにコミュニケーションが取れない人が来たならちょっと怖いですけど、コミュニケーションが取れないとかネットの文章だけじゃ分からないんで、でもそういう意味では僕結構心配ないなあって楽観的だった。

印象と違う人が来ても話せばなんとかなるだろうという。コミュニケーションが取れないような相手が来た場合には困惑するが、ネットの文章だけではそこまで見抜けないため楽観的に会うと語っていた。こうした楽観的な姿勢の背景には「うまくいかなければ、自然と疎遠になるだろう」という考えがあるように思われる。A、C・D、Fはギャップで関係が崩れてしまうことについて以下の様に語っている。

大江: 2人ともネットで何人か会ってると思うけど、会って印象が違ってさ、今までの関係が崩れちゃうことは怖くなかったの?

C: 怖いっていうか、しょうがないなあって。

D: しょうがないかなって感じ。

大江: (ネットで知り合った人と会う際に) 緊張感があって上手くコミュニケーション取れんかもしれないけど、会いたいとは思って?

A：取りあえず会ってみたら良いんじゃないかな、っていう風に思いますね。別に続かなかつたらそれだけなんで。

F：ちょっとマズいことですけど、自分に合わない人って、意図的じゃないですけど、自然と合わない人同士って会話しなくなるじゃないですか。だから、あんまり心配はしなかったですね。合わなかつたら自然と疎遠になっていくんだろうなって思ってるので。

うまくコミュニケーションができなくても「しょうがない」「続かなかつたらそれだけ」「自然と疎遠になるだろう」と、ギャップによって関係が崩れることをリスクと捉えていないように思われる。

第2項 ギャップがリスクになる相手とは合わない

第1項でギャップをリスクと捉えず、対面で会っていたB、Fであるが、インタビュー内で以下の様にも語っている。

B：基本女性とは会わないですね。割と物騒なあれあるじゃないですか、ネカマとか。だから基本的に女性を名乗るアカウントとは1回も会ったことがないですね。

F：自分の中で想像しているので。会ってしまうと自分の中でのイメージが崩れちゃうんで、それがちょっと嫌な時もあるので。だから最近はあまり会わないようにしてるっていうか、新しい会ったことない人と会うっていう事はあんまり無いですね。

大江：それはネットと印象違ったらあれやなって感じー。

F：そうですね。僕の中で理想があるので、こうであってほしいみたいな。なので、自分から会おうとするのは、本当にたまたまぐらいの感覚ですね。

Bはネカマ（ネット上で性別を偽っている人）を想定し、女性を名乗るアカウントとは会わないという。Fはネット上で相手のことを理想化している場合があり、その印象が崩れるのを避けたい場合には会わないと語っていた。ギャップを想定した上で、それがリスクになる相手とは会わないようにしている語りが見られた。

第3項 実際の姿を想像しないようにする

AとDからは共通して、「実際の姿を想像しないようにしている」という語りが見られた。Dは過去にネットでのイメージと大きく異なった人が来た経験があり、それ以来実際の姿は想像しないようにしているという。

D：イメージしてても実際会ったら全然違う人やった、っていうのが結構あったんで、イメ

ージするよりかはしてないですね。

その理由に関して、自分が想像していた姿とギャップがあった場合に「しんどい」、とネガティブに感じてしまうためだと語っていた。

大江：Dさんは今までに全然違う人が来てから想像しないって言ってたけど、それってというのは、イメージと違うとうまくコミュニケーション取れないとか、なんでやったんかな。

D：そうです。最初分かっていた人の感じで喋って違ったらしんどいなあ、っていうのがあって。

また、AはBに対してTwitter上で暗いという印象を抱いていたが、それをリスクと捉えていなかったのか尋ねてみたところ、以下の様な回答があがった。

大江：今回のやつはさ、最初ツイート見てB君暗いみたいな印象やったやん。暗い人が来るかもなーっていうのを悪い風に思ってなかったの？

A：まあ、どんな人が来るか分からないから。実際の人にはどんな人が来るか考えないようにしてたけど、そうは言ってもツイートの口調とかあるじゃないですか。

A：まあ、どんな人が来てもっていう心構えで。やっぱ想像しちゃうと、それと違った時うまく話せないみたいな。

ネット上から印象は受けるが、実際にはどんな人が来るか分からない、とギャップを想定しているのである。その上で、会った際にギャップを感じるとうまく交流できなくなる可能性があるため、実際の姿を想像しないようにしていると語っていた。

第4節 ギャップの活用

C・Dからギャップを活用し、コミュニケーションをスムーズにしているという2つの事例が語られた。一つ目が“容姿に関するギャップの指摘”である。「お互いのギャップを指摘する前後で距離感に変化したか」という質問に対して以下の様な回答があった。

C:外見的な部分についてのギャップを言うのは距離縮まるというか、ワイワイ盛り上がる、心の許す度が上がるっていう感じで。でも内面的なギャップについて言う時は、既にある程度仲良い状態なんで、そこから別に距離感は変わらないです。

D:外見のギャップだったら、自分がどう思われてるのが分かって、仲良くなるきっかけになるっていう感じです。けど内面のギャップは、仲良くなってからじゃないと喋らないので、もう既に仲良くなっている分に、それを話してもそんなに変わらないか、思っていたよりも良く見られている場合やったら、嬉しくなって更に仲良くなるんかなって思います。

内面的なギャップに触れるのは仲が良くなってからであるため、指摘の前後で距離感に変化はない。一方で外見的なギャップの指摘は、盛り上がったたり、自分がどのように思われているかを知ることができ、仲良くなるきっかけになると話していた。

そしてもう一つの事例が“ギャップをイじる”というものである。C・Dの共通の友人に、Twitter上では標準語で饒舌だが、リアルでは笑わずキツイ関西弁で声が小さく、自分から積極的に話すことはないというギャップがある人がいた。

C: Twitter やとすごい饒舌なんですよ。

D: そう!

C: リアルはマジで全然笑わんし (D: 話題を提示しないと) 喋らんし。で、声小さくて何言っとるか聞こえん、って。

D: 関西弁が強くて、ちょっとアツってなる。

大江; それはネットの時の関西弁じゃなくてー。

C: いや、ネットの時は標準。

D: だから普通の人だと思ったら、関西弁。

C: 結構強いよね。

D: めっちゃ強い。

一般的にはネガティブに受け取られそうなギャップであるが、そのギャップでイジられ、キャラとして肯定的に受け止められているという。

C: それでなんかもイジられてるからね。

D:そう。そういうキャラ、確固たる地位。そういう人かーって。

「声が小さくて何言ってるか分からない」とイジられており、それに対して「小さくてごめんなさい」と肯定する返しをしていると語っていた。一般にネガティブに受け取られるようなギャップが、イジりを通してキャラとして確立し、ポジティブなモノに変換されていた。

ギャップを感じて困惑するのではなく、“容姿のギャップを指摘”したり“ギャップをイジったり”と、むしろ積極的に触れていくことでコミュニケーションを円滑にしているという語りが見られた。

第6章 ネガティブなギャップの分析

第4章、第5章では、想定と真逆のタイプが来た場合にも当惑することなくネットと同じ距離感で接している様子や、ギャップを受け手側の問題として寛容に捉えている様子が見られた。しかし今回の対象者達からは、許容できない種類のギャップや過去にギャップがあっとうまくいかなかった経験も語られた。この章ではそうした語りを取り上げて、分析していく。

第1節 許容できないギャップ

「ここが違っていたらイヤだと思うギャップはあるか」と尋ねたところ、Aは以下の様に回答していた。

A：まあでも性格とかテンションは、捉えようなんです。

大江：それは見てる側のってこと？

A：そうです。なので、そういう所はまず置いておいて、自分がSNSで言ってた経歴とか事実。それが嘘だろうなって分かったらちょっとヤバイですよ。

大江：そうね。なんで？って思うね。

A：そうですね。訳の分からない見栄を、誰に対してかもわからんと張ってたんやなっているの。それやったら別に会いたくなかったかな、って思うので。

第5章でも取り上げたように、性格は受け手側の解釈の問題であるため許容できる。しかし、自分がネット上で話していた“経歴や事実がうそ”であった場合には、「誰に対してかも分からない」「訳の分からない」見栄を張っていたのか、と与える側の動機が理解できず、許容できないと語っていた。同様の質問に対し、Eは許容できないギャップとして“顔と性格のズレ幅”をあげていた。

E：顔と性格ですね。取りあえず、顔と性格がネットよりも落ちるっていうのは当然そうなんですけど、あまりにもズレ幅が大きすぎたらヤバイ奴だって、それは察知できるので、色んな意味でお近づきになりたくないし。性格が違いすぎたら、結局性格に惹かれて集まってる訳なので。そもそも性格が合うかなと思って会ってる訳なので、それでリアルが違う性格だったら、リアルで仲良くなれるかは当然また分からない訳です。

性格に関しては会う前提であり、そこが違いすぎると仲良く出来るかは分からないとネガティブに受け取るようであった。また、ある程度ネットの印象よりも落ちることは想定しているが、その幅が大きすぎる場合には“ヤバイ奴”だと認識し距離を置くという。なぜ顔と性格のズレが大きすぎると“ヤバイ奴”と認識するのだろうか。その理由に関して、Eは以下の様に語っている。

E：もしネットの方が良かったとか、ネットの方が悪かったっていうのは恐らくなにか理由があってそうしてるんだろう、って思うじゃないですか。

大江；理由っていうのは？

E：なんとなくっていうのもあると思うんですよ。なんとなくネットの方が良い人を演じますとか。

大江；うんうん。

E：そういうのがあると思うんですけど、その理由がわからない。なんでそうやっているのかわからないっていうのが怖いから、強いて言うとしたら。

大江；なりきりアカとかやったら理由はわかるけどー。

E：そうですね。なりきりとかだと分かるんですけど、そういう訳でもなくて、ただただ好きでやっている、好きでやっているのか分からないですけど。ネットで、TwitterであったりInstagramとかそういうので、なぜ普段の自分とわざわざ違う性格を演じるのかっていう意味が分からなくて怖いっていうのはあるかもしれないですね。

ズレ幅が大きすぎると“演じている”と感じ、その動機が不明であるからだと言っていた。

「ギャップは受け取る側が勝手に解釈するために生じてしまう」と語っていたEであるが、度合いが大きすぎた場合は「なぜ普段の自分と違う性格を演じているのかわからない」とそこに発信者側の“意図”を見出し困惑するようであった。

第2節 ギャップがあつてうまくいかなかった事例

過去にギャップがあつてうまくいかなかったことはあるか尋ねたところ、C・D・Eから具体的な事例が挙げられた。本節では、そうした事例を取り上げ分析していく。

EはTwitterで明るく話が合うという印象を持っていた相手と対面で会った。しかし、リアルでは会話は合わず、コミュニケーションも取りづらかったという。また、自分が想像していた姿とのズレ幅がかなり大きく、ネットだけの付き合いでいいと感じたと語っていた。

E：ネット上で割と明るいついていうかテンション高めの人だったんですけど、いざ会ったらすごいコミュニケーション取りづらいし、喋る内容もそこまで面白い訳じゃないし。何より自分のイメージとさすがにかけ離れすぎてたので、生理的にダメだった訳ではないけど、ちょっとさすがにリアルで関わったことがないレベルの人だったので「ああ、ちょっとネット上だけの関係でいいかなあ」って僕は思いましたね。

そうしたギャップは会って直ぐに感じていた。しかし、最初の話題が一般的すぎたためかもしれないと考え、ネットで共通だった話題を振ったという。

E：最初にあまりにも普通なこと、かなり一般的な話題で話してたんですよ、学校のことであったりとか学部のことだったりとか。そういう話をしてたんですけど、結局それだとあまり話が盛り上がりませんでした。ということで、ネットで話題があった共通のゲームの話とか、好きなアニメの話とか、そういった話をしましたね、結局。

大江；そういう話したのは、本性・素が出るとか、仲良くなれるかもみたいなのがあったんかな。

E：そうですね。普通に話してくれるかな、普通についていうか、僕の想定しているテンションで話してくれるかなと思ったんですよ。

大江；それは結局上手く行かなかったんか。

E：そうですね。当然学部とかの話よりは食いついてくれたし、元気に話してくれたんですけど、それでも思ってたよりもちょっと、まあ……って感じですね。

自分が想定していた明るさで話してくれることを期待したが、そこまでは届かず、先の「ネットだけの関係で良いかな」という結論に行き着いていた。

Cは過去にInstagramから対面で会ったが、ギャップを感じ一度切りで関係が途切れてしまったことがあるという。感じたギャップの種類についてCは、以下の様に語っている。

C：ネットだと文字送るのに時間差があつていいから考えて送れるけど、対面だと直ぐに。

大江；即レスみたいなのせんなん。

C：出てこんから、ちょっとそれで。インスタの時は相手が結構話振ってやりとりしてたんですけど、対面だと相手もそんなに喋るタイプじゃなかったから、仲良くなるまでに時間が掛かるなって思っ。

Instagram では積極的に話題を振ってくれるタイプだったが、リアルは大人しいタイプであった。Cも直ぐに言葉が出てくるタイプではなく、交流がうまくできなかったという。そのギャップは「初めて顔を合わせた際にぎこちない笑みが返って来たとき」とかなり早いタイミングで感じていた。Eはギャップを話題の問題かもしれないと考え、ネットで知っていた共通の趣味の話振っていた。しかし、CはギャップをSNSと現実のコミュニケーションの違いに帰因するものと捉えて、諦めの姿勢を見せていた。

大江；Cさんの場合は、最初ぎこちない笑みあってダメかもなって話やったけど、インスタで長い間交流してたってことはある程度話合うはずや、みたいなのはなかったん。

C：SNSとかメッセージやと、考えて送れるから。「これ送ったら相手返信困るやろうなあ」みたいな事は送らんと話題続ける感じのこと送ってたから、多分続いてたと思うんですけど。

大江；そこでネットと現実のコミュニケーションは違うから、仕方ないかなって感じ。

C：そうですね。

ネットでの交流は時間差があり、相手が返信しやすい話題を考えて送っていたから続いていたのであって、即時的な現実のコミュニケーションでうまくいかないのは仕方がないと捉えていた。

DはTwitter上で敬語で適切な距離感で交流していた相手と対面で会うに至った。しかし、実際に会った際には距離感の詰め方が早く困惑したという。その後は深い関係になることなく、リアルでもネットでも疎遠になったと語っていた。

D：喋ってる時、SNSとかTwitterとか文面やから余計なのか分からんけど、しっかり礼儀正しかったし、最初から敬語っていう感じで喋ってたけど、いざ会って見たら距離感の詰め方が異常に早くて、「あ、ちょっと早いかなあ」って。

大江；早すぎる感じか。

D：早すぎる。文だとそこまでグイグイ感がなかったんですけど、いざ喋ったら「めっちゃグイグイ来る、スゲエ喋る」みたいな。

大江；ちょっとビックリみたいな。

D：初対面でそこまでグイグイって来られるのが「あっ」ってなる人なんで、「ああ、ちょっと違うかも」って思ってた、それは。

また、そのギャップに対しても受け身になるだけで対応できなかったと語っていた。

大江；盛り上がらなかつたら「ネットの話題振つたら良いかな」みたいなのあるけど、相手がグイグイ来る場合っていうのは、こうしたらネットと同じ感じになれる、っていうのはあんまりなかつたかな。

D：グイグイ来られると自分はもう受け身になるしかないから。もう、しゅんって。

第3節 ネガティブなギャップを感じたあとの関係性

今回の調査では、リアルでは関われないようなネガティブなギャップを感じたあとの関係性は二つに分かれていた。一つ目は、第2節のC・Dのようにリアルもネットも疎遠になるパターンである。もう一方はEのように、ネットでの関係は維持するケースである。Eに「リアルの姿を知ってしまっても、関係を続けようと思ったのはなぜか」と尋ねてみたところ、以下のような回答があった。

E：ネットだと趣味が合うし、テンションが低いとか高いとか、声が聞こえづらいつか、一緒にいて不快感を感じるとか、そういうの無いじゃないですか、ネットって。

大江；そうですね。

E：文字のやり取りだけなので。それだったら普通に喋っていて楽しいし、ネット限定でなら付き合ってもいいかなって思う人がいて、僕は普通かなって思うんですけど。

大江；現実でそういう、実際はこんな人だっていうのを見ても、そこまでイヤにならなかった？

E：現実が現実、ネットはネットで分けて考えたりする……

大江；別っていう感じなんか。

E：そうですね。割と僕そういう風に考えてます。

ネット上の交流は文字だけのやりとりであり、「テンションの高低」「声の聞こえづらさ」といった、リアルの中で交流を妨げた要素が排除されているため、普通に楽しむことができるという。実際にはネットと違う姿であることを知っても、ネットと現実とは別と考え気にしないと語っていた。具体的な事例は挙げられなかったが、Aも同様の考え方をしているようであった。

A：SNS で見たときはおもしろかったけど、(リアルは) あんま面白そうじゃなかったなって思っても、それはそれというか。じゃあそれだったら実際には会わんと SNS の中で楽しんでおけば、それはそれで良いのかなっていう考えがあるので。

A：そうですねー、(リアルで) 付き合ってたあんま面白そうじゃなかったら、面白いネットだけの方でいいかなっていう合理的な考え方をするかもしれないですね。

実際に会いネガティブなギャップを感じても、面白いネットだけの方で付き合うという「合理的」な考え方をすると語っていた。

では疎遠になったC・Dは、どのように考えているのだろうか。「実際に会ってネガティブなギャップを感じた後に、ネットで交流しに行くことはあるか」と尋ねてみたところ、「自分から交流しに行こうとは思わない」という。その理由を述べているのが以下の語りである。

C：仲良くなれない人にワザワザ絡みに行ってもなあって感じはあります。ちょっと仲良くなれなさそうだなって思って、もう1回チャレンジするストレスのリスクより、この子はもうよっ友とか会った時に喋るぐらいでいっかと思う。

大江；1回会ってダメやったら結構ダメかなって感じになるんや。Dさんはどう？

D；なんか似てて。1回チャレンジしてダメやって、もう1回行こうとは思うんですけど、それで同じ結果になったら時間の無駄っていったらあれだけど、それだったら仲良い子と喋ってる方がいいなあって思いますね。

仲良くなれる見込みの薄い相手にネットで絡みに行っても、再び関係が上手くいかずストレスを抱えたり時間の無駄になるリスクがあるためだという。A、Eは「リアルがダメなら楽しいネットの方で交流しよう」とネットとリアルを別個の付き合いとしていた。それに対してC・Dは「リアルで仲良くなれない相手にネットでワザワザ絡みに行こうと思わない」と、ネットとリアルを地続きの関係であると捉えているようであった。

ネガティブなギャップを感じたあとの関係は、ネットと現実を“地続き”とするか“別物”と見なすかという考え方の違いによって、完全に疎遠になる場合とネット上でのみ関係を維持するという2つのケースに分かれていた。

第7章 考察

本論文の主題は「ネットと現実の姿にギャップを感じると、困惑しうまくコミュニケーションが取れなくなるのではないか」という問いであった。先行研究では、他者のギャップに寛容でギャップがあった方が関係を継続しているという結果が示されており、当惑に結びつかないことが窺えた。今回の対象者達からもギャップに寛容である姿勢や、想定と真逆の相手が来た場合においてもそのギャップを受け止め当惑せず交流している様子が見られた。しかし、許容できない種類のギャップやネガティブに作用した経験も語られており、当惑に結びつくようなギャップも存在すると言えるだろう。

では、一体どのような理由でギャップは当惑に結びついていなかったのか。また、どのようなギャップはネガティブに作用するのだろうか。

第1節 ギャップが当惑に結びつかない理由とは

なぜギャップを感じても、当惑せず交流することができたのだろうか。その理由としてまずあげられるのが、第5章第3節で見られたように彼らが“端からギャップを想定している”という点であるだろう。今回の対象者達はネット上で相手のことをイメージするものの、イメージ通りの相手が来るとは思っていないと語っていた。そのうえで「ネカマが見れるかもしれない」「相手に抱いている理想像が崩れてしまうかもしれない」といった当人達にとって、“ギャップを感じるうまくコミュニケーションが取れないことが、リスクになり得る相手とは会わないようにしている”のである。またA、Dのようにギャップを感じると困惑する可能性があることを自認している場合は、実際の姿を想像しないように、つまりは“相互行為の方針を獲得しないようにする”という対処法をとるのだ。

こうした試みを経た上で、リスクにならないと判断した相手と対面で会うに至る。そして実際に会い想像と違う相手が来た場合でも、彼らは“そのギャップを寛容に受け止める”のである。トレンド総見(2013)の調査では、ギャップに対して寛容な結果が示されていた。本稿の対象者も同様の考えを持っており、その背景にあるのは「ギャップは受け手側の問題である」という認識であった。自身のギャップ意識もこの寛容さの土台になっていると考えられる。清水(2017)では、自身のギャップ意識を他者のギャップ評価に反映させる可能性が指摘されていた。A、C・Dは自身のギャップについて「Twitterでは言うことの区別があるため端から見たらあるかもしれない」「ギャップがあるとと言われても意図したものではないため評価を気にしない」としていた。また彼らは他者のギャップについて「普通のこと」「こういう人かと思うだけ」と寛容に受け止めていた。こうした寛容さは、「Twitterでは言うことの区別があるためギャップが生じるのは普通のこと」「意図的でなければ、こういう人かと評価を気にしない」と自身のギャップ意識を反映させた結果なのではないだろうか。

また、彼らはギャップを寛容に受け止めるだけでなく、“コミュニケーションの材料として活用”する。その具体的事例として挙げられたのが、第5章第4節で見られた“外見的な

ギャップの指摘”と“ギャップに対するイジリ”であった。外見的なギャップを指摘することは、場を盛り上げ最初の話題にもなると、アイスブレイクとして機能していた。またギャップへのイジりは、ギャップをコミュニケーションをスムーズにする“キャラ”として確立させる行為であるように思われる。

ギャップを寛容に受け止めたり交流の材料にするといった対応を、落ち着いて取れる裏側には、“うまく行かなくても、自然と疎遠になるだけだ”という考えがあるだろう。第5章第3節の第1項では、ギャップが発生しコミュニケーションが取れなくなるという状況に対して、「しょうがない」「続かなかつたらそれだけ」「自然と疎遠になるだろう」と楽観的に捉えている様子が見られた。ギャップを感じコミュニケーションが取れず、関係が崩れることをリスクとして認識していないことが、「話せばなんとかなる」といった安心感につながっていると思われる。

第2節 ネガティブに機能するギャップとは

では、ネガティブに機能するのはどのようなギャップなのだろうか。今回の調査では、そうしたギャップは2種類に大別できると考えられる。

まず1つ目がA、Eの語りに見られた意図的なギャップ、つまりは“うそ”である。Aは許容できないギャップとして「経歴や事実がうそ」というものを挙げおり、その理由とされたのが「誰に対しても分からない、訳の分からない見栄を張っていた」と動機が理解出来ない点であった。今回の対象者達はギャップに対して寛容であったが、その背景にあったのは受け手の問題という認識であり、それと反する与えた側が意図的に生み出したギャップは、不信感へとつながるのであろう。また“意図”があったかどうかは、受け手側の判断に依拠することになる。Eは許容できないギャップとして「顔と性格のズレ幅」を挙げており、ズレ幅が大きすぎる場合には「演じている」と感じ、動機が不明であるため困惑すると語っていた。ギャップの程度が受け手の基準を大きく上回った場合、それは受け手側の解釈の問題から、与えた側の意図によって生じたもの、つまりは“うそ”へと変換されるのである。ゴッフマンは、「抱かされた印象が真であるか偽であるかを問うとき、われわれが本当に問いたいと思っているのは、パフォーマーが当該問題になっているパフォーマンスを扱う権限が与えられているかいないかであって、実際のパフォーマンスには第一義的な関心のないことがある。」(Goffman, 1959=1974, 68p)とした。ネットを介した出会いにおけるギャップも、その内容自体が問題になるのではなく、ギャップが“うそ”へと転換され、不信感に繋がるのが関係にネガティブな影響を与える要因であると考えられる。

そしてもう1つがC、D、Eから具体的事例が挙げられた“コミュニケーションが取りにくい”というギャップである。前節で見たように、彼らはギャップを想定して困惑しないよう対処法を取ったり、生じたギャップも寛容に受け止める用意がある。しかし、「距離感の取り方が違った」「話題を振るタイプではなかった」といったギャップを感じた場合に対応できなかつたり、SNSと現実のコミュニケーションは違うから仕方ない、と対応することを諦めてしまう可能性がある。

しかし、こうしたネガティブなギャップを感じる事が関係の終了に直結している訳ではない。第6章第3節のA、Eの語りに見られたように、ネット上に限って関係を継続するケースがあるのだ。Eは、ネットでは「テンションの高低」や「声が聞こえづらい」といったことがなく、趣味が合うため交流することが楽しいと語っていた。つまり彼らはネットを現実の延長線上ではなく、交流を妨げた要素が排除されている“独立”した空間として認識しているのである。そのためリアルでネガティブなギャップを感じても、会う前に面白いと感じていたネット上でのみ交流を続ける、というのは至って“合理的”な選択となるのだ。渡辺・山下(2009)では、印象変化があった方がネット上で関係を継続していた、とギャップが関係にプラスに作用する可能性が指摘された。本稿では、ギャップがあった方が良いという結果は得られなかったが、ネガティブなギャップを感じてもネット上

で関係を継続しているという事例が見られた。ギャップを感じた後の関係性は、ポジティブであれば続きネガティブならば途絶えるといった単純な二分法的帰結を迎えるのではなく、“リアルがダメなら楽しいネットのみで交流する”という第三の選択肢があるのだ。

第3節 まとめ

アーヴィング・ゴッフマンは『行為と演技』の末節で、この世に当惑が生じない相互行為はないとしたうえで「人生に賭けのようなところはあまりないかもしれないが、相互行為は賭けなのだ」(Goffman、1959=1974、286-287 p)と記した。それからおよそ半世紀が経った現代では、“ネットを出発点として出会う“という更に当惑が生じる可能性が高い相互行為の手法が登場した。だが、彼らにとってネットを介した出会いは、決して分の悪い賭けではない。なぜなら、ギャップが生じる事は”織り込み済み“だからである。そのうえで、リスクにならない処置や判断をした相手と対面で会うに至り、生じたギャップも寛容に受け止めたり交流の材料として活用する用意がある。ときには、関係がうまくいかないこともあるが、それは想定内の仕方のないことであつたり、ネット限定で交流を楽しもうという結論に行き着くだけのことであつて、リスクとはならないのだ。

今後新たな SNS やマッチングアプリなどが開発されていき、ますますネットを介した出会いの比重は高まっていくと思われる。その際に避けては通れない“ギャップ”とうまく付き合いながら、彼らは新たな出会いや交流を楽しんでいくのだろう。

注

- (1) 大学の友人と繋がるためのアカウントのこと。入学を機に新規で作成される場合と、高校時代のアカウントをそのまま大学アカとして引き継ぐ場合がある。
- (2) ツイッター廃人の略称で、Twitter の利用に没頭あるいは依存しており、利用頻度が日常生活に支障を来す程度に達しているような人を指す俗な言い方（Weibo 辞書「ツイ廃とは何？」）と定義されているが、今回の対象者達はヘビーユーザーと同程度の意味で用いている様に思われる。
- (3) 空中（くうちゅう）リプライの略称で、特定の相手に対する発言をリプライ機能を使って直接伝えずに、タイムラインに公開する形で発言することを意味して俗に用いられている語。（「空リプ（くうちゅうリプライ）」の意味や使い方 Weblio 辞書）
- (4) 特定の仲が良い相手とのみ繋がるための、交友関係を圧縮したアカウントのこと。

参考文献

- ・清水万里名, 2017, 『大学生のリアルと SNS でのキャラの違いーゴフマンの概念を用いてー』早稲田大学文化構想学部平成 29 年度卒業論文
- ・渡辺未緒, 2009, 『インターネット上の知り合いに抱く友人像』渡辺未緒・山下清美, 専修ネットワーク&インフォメーション (14) 11-15 p
- ・Erving Goffman, 1959, The Presentation of Self In Everyday Life (石黒毅訳, 1974, 『行為と演技ー日常生活における自己呈示』誠信書房)

参考サイト

- ・総務省, 2017, 「平成 29 年版 情報通信白書 | SNS がスマホ利用の中心に」 (<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc111130.html> / 2021 年 1 月 28 日取得)
- ・総務省, 2018, 「平成 30 年度版 情報通信白書 | 実際に会うことによる信頼度の変化」 (<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd143220.html> / 2020 年 11 月 21 日取得)
- ・Weblio 辞書, 2021, 「ツイ廃とは何？」 (<https://www.weblio.jp/content/%E3%83%84%E3%82%A4%E5%BB%83/> / 2021 年 2 月 13 日取得)
- ・Weblio 辞書, 2021, 「「空リプ（くうちゅうリプライ）」の意味や使い方」 (<https://www.weblio.jp/content/%E7%A9%BA%E3%83%AA%E3%83%97/> / 2021 年 2 月 13 日取得)
- ・トレンド総見, 2013, 「～「ネット人格」事情を徹底調査」 (684f79bb84bd2e5efe7b02292948b75f.pdf (trendsocket.com) / 2021 年 1 月 28 日取得)